

ある戦争遺跡にみる追悼の重層性と相互反映性 —地域づくり資源・学習資源・観光資源 としての陸軍病院壕—

徳島大学総合科学部

樫田美雄（かした よしお）

要旨：沖縄戦跡のひとつとしての南風原（はえばる）陸軍病院壕に関して、社会学的追悼研究を行った。社会学的研究は、追悼をその実践過程でみることができる。そして、実践過程研究をおこなうと追悼の重層性・相互反映性がみえてくる。南風原の事例もこの例外ではないようだった。なお、まとめの一環として、人称構造論的追悼論を試行的に論じた。

1. はじめに：追悼の社会学・序論

「追悼」とは『広辞苑』によれば、「死者をしのんで、いたみ悲しむこと」である。この定義に不満はない。しかし、国語学と社会学は違う。すなわち、このような「追悼」の辞書的意味がわかることと、実際に人々が行っている実践としての追悼のありようがわかることとは、別のことである。社会学が探求しなければならないのは、むしろ、追悼の実践的意味の解明の方であろう。そして、その追悼の実践的意味の解明は、個別の追悼が他のどのような振る舞いや考えと結びついているのかということの探求を通して行っていくことができるものであろう。本稿が目指している「追悼」の研究はこの社会学路線のものである。

ところで、上記のような追悼の実践的意味の解明を目指したときに、追悼はどのようなものとして見えてくることになるのだろうか。結論を先取りしていうならば、そのとき追悼は、重層的で相互反映的なものとして見えてくることになる。今回我々の調査班（追悼班）が探求した全ての対象においてこの重層性と相互反映性は見て取ることができたが、本稿では、そのうち「南風原陸軍病院壕遺跡および南風原文化センター」を対象として記述を行う。この対象においてとりわけ「重層性」と「相互反映性」があらわだったからである。研究はまだ道半ばであり、本稿は中間報告的素材提示ということになるがお許し頂きたい。

2. 重層性：観光としての追悼・史跡としての病院壕

手元に2つのパンフレットがある。ひとつは『沖縄本島MAP&観光スポット』というホテル配布の資料[G R G ホテル那覇東町、発行年不詳]であり、もう一つは『南風原みぐい』（南風原めぐり、の意か?）という南風原町教育委員会発行の資料[南風原町教育

委員会、発行年不詳]である。

前者の資料では、主要なみどころ8カ所のうち3カ所（首里城、ひめゆりの塔、平和祈念資料館）が、沖縄戦跡と呼ばれる追悼関連施設になっている。「物見遊山（観光）」と「追悼」との関係は、それ自身稿を改めて述べるに値する重要なテーマだが、少なくとも現在の沖縄に関して、「追悼」関連施設が重要な観光資源になっていること、もっと踏み込んでいえば、「追悼」という振る舞いと「観光」という振る舞いが重なって存在していることは、間違いのないことであろう。

後者の資料では、「陸軍病院壕跡」および「弾痕の残る塀」が、“南風原の史跡”として紹介されている。とりわけ「陸軍病院壕跡」については、約1000字の紹介文とイラストまでついており、さらに平成2年（1990年）に町指定文化財に指定されたことが紹介されている。後のインタビューで判明したことであるが、この戦争遺跡の文化財指定は、前例がなかったということに鑑み、文化庁との数次にわたる交渉がなされた末のことであった。いずれにしろ、いまや「観光としての追悼・史跡としての病院壕」という文脈の中に『南風原陸軍病院壕』は存在する。他のどのような文脈が関係しているのかは、これらの資料からだけではわからないが、少なくとも、『南風原陸軍病院壕』は、遺族にとっての追悼、宗教関連施設としての追悼施設、というような普通に想像される文脈だけの下にあるものではない、このことをまずは確認してこの節を終えることにしよう。

3. 相互反映性：「再発見」された追悼対象としての陸軍病院壕

第1節では、追悼をめぐるどのような振る舞いを実際に人々が行っているか/いたか、が、社会的な追悼研究においては重要である、という主張を行った。そして、第2節では、現在の南風原陸軍病院壕が、沖縄全体としては「観光施設」の文脈下であり、南風原町的には、「史跡」として「社会教育施設」の文脈下にあることを確認した。しかし、南風原陸軍病院壕ははじめからそのような意味を帯びていた訳ではない。そもそも、南風原陸軍病院壕は、1982年以降「再発見」されたものなのである。戦後すぐから本土復帰後しばらくまでを含む長い期間にわたって、それは「追悼性」をほとんど持っていなかった。「南風原陸軍病院壕施設」と「追悼」の関係を考えるには、それが、長い間「追悼」されていなかった、という歴史を踏まえる必要があるだろう。本節では、この「空白」と「再発見」に関わる経緯をインタビュー調査をもとに述べていくこととする。

「南風原陸軍病院壕」は、1982年ごろ、追悼対象として「再発見」（あるいは「発見」）された。2006年2月23日に、南風原文化センター（南風原町教育委員会管理の社会教育施設）において、館長の大城和喜氏と学芸員の平良次子氏に対して我々が行ったインタビューによれば、経緯は以下の通りである（以下引用部分は、インタビュー要旨をまとめた[檜田、2007：1]からの抜き書き）。

そもそも、[南風原陸軍病院壕がある]「黄金の森」（悲風の丘）は、「がいこつやま」だった。戦後37年たったあとの、1982年の厚生省遺骨収集事業による「再発見」。

じつは、当該地には、復興が一段落した昭和28年に、村民によって木製の碑が立てられていた。館長の大城氏によれば「村民が引き上げてきたときに、この辺が焼け野原で、材木が必要で、病院壕から(建設資材としての)材木を取る必要があった。そのときに遺骨がたくさん出たので建てた」ということである。つまり、この昭和28年(1953年)の木製の碑による追悼を1回目の追悼と考えれば、1982年からの施設整備を伴った追悼は、2回目の追悼であるといえるだろう。1982年に、追悼対象としての陸軍病院壕は「再発見」されたことになる。その一方で、この木製の碑の設置は、死者に対する追悼が直接の目的ではなかったもので、1回目の追悼とは言えない、という見方もあり得るかも知れない。経緯からみて、木製の碑設置は、「追悼」というよりは「汚れ払い」的意味合いが濃い振る舞いであった、とも言えそうなのである。そう考えれば、厚生省遺骨収集団による1982年の活動以来の事件が初発の「追悼対象の発見」である、ということになる。

なお、忘れてはならないのは、この1回目の追悼と2回目の追悼との間に、本土からの追悼的関わりが存在している、ということである。1966年に「悲風の丘」という追悼碑が建設され、佐藤栄作首相の銘が入っている。地元では「悲風の丘」と呼ぶことはないというが、山の麓の入り口には、いまでも「悲風の丘」という立て看板が掲げられてあり、本土関係者には、一定の知名度を持った呼び名になっているようである。さらに興味深いのは、このような由来のわかっている追悼関連施設以外にも、たくさんの、由来不明の地藏等が設置されていることである。大城館長はにがにがしげに「勝手に『南無阿弥陀仏』とか『お地藏さん』とかが置かれることは困る。所有はこっちだから、撤去できる。検討しなけりゃならん」とおっしゃっていたが、1つの山が、地元民にとっての追悼の形とは違った形の追悼を受ける対象として、「重層性」を持って存在し続けていることは、忘れてはならない事実だと思う。そのような「重層性」を支える相互行為があり、さまざまなリソース(碑文等)を結節点に、相互行為が積み重なってきていることを、ここでは確認しておきたい。



【写真1：悲風の丘石碑（佐藤栄作の銘あり）】

※佐藤栄作書の碑文は、昭和41年（1966年）の日付になっている。復帰前である。

しかし、「山」が、地域の人々の（非人称的な、非親族的な死者追悼地であり）信仰の対象だったことがそれに先行している。

病院跡地であるのは、たまたま。それ以前に山（自然）が死を象徴していた。

たしかに、すくなくとも地元民にとって、戦後30年間以上、「陸軍病院壕」は顧みられることがなかった。しかし、この陸軍病院壕のある山が、地元の人々に「がいこつ山」ともともと呼ばれていたことも重要である。「黄金の森（こがねのもり）」という現在の名称は、この「伝統」に依拠している（こがね≒遺骨）。大城氏いわく「人の骨のことを黄金というんです。ここは100いくつかの墓がありますよ。ここ[黄金の森]だけ、南風原では岩があります。その岩の下に骨をそっと置いておく。[むかしは]庶民は墓をつくってはいけなかった。黄金の森には、ずっとずっと南風原の祖先たちが眠っている。信仰の対象である。そこに沖縄戦ではたくさんの方が亡くなった。」

沖縄には、洞穴式の墓の伝統があるという[名嘉、1999：65]。「がいこつ山」はそのような墓所のひとつだったのだろう。つまり、元々墓があり、祖先崇拜の対象となっていた山、骸骨のイメージと結びついた山が存在し、そこに陸軍病院壕が作られ、放置され、再発見された、ということのようなのである。しかし、このような「連続性」、「交錯性」が、当初から意識されていたものであるかどうかは、確証がない。館長へのインタビューは、2006年時点のものであり、事後的・遡及的物語づくりの影響から免れ得ていないか

らである。

とすると、確実にいえることは以下のような内容になるだろう。つまり、少なくとも「南風原文化センター」ができて以後は、「南風原町の伝統」と「南風原陸軍病院壕」の存在は、親密性のあるものとして、連続可能なものとして存在したと。すなわち、町の事業として「学校給食センター」跡を「文化センター」にする構想が立てられ、そこで展示をどうするかが問題になり、「町のアイデンティティ（イメージ）」が問題になり、「沖縄らしくないこと」が問題になり、つまり、「基地もなければ、海もない、沖縄らしくない南風原」が問題となり、かわりにどのような特徴が町にあるのかが問題となった。そのなかで、那覇から南部各地に至る「道」（あるいは「十字路）」という概念が町の地理的・歴史的特徴として重要であると認識された（かつて、軽便鉄道が走り、第2次世界大戦では日本軍の敗走路になり、現在は、高速道路のインターチェンジが存在する。そもそも、沖縄そのものが、中国と日本と南米移民先との、文化的、民族的十字路である）。そして、そのような地域イメージの再構築過程のなかに「陸軍病院壕」が、「那覇から移転してきた病院であったこと」「ひめゆりの塔所在地に移転していく途中の壕であったこと」が、町のイメージにふさわしいものとして、理解され、埋め込まれていった。この話題性（すでにそのころ『ひめゆり部隊』は十分に有名であり、『南風原陸軍病院壕』には関連施設としての価値が見えていた）と、地域的伝統（山が墓でありかつ、南部への通り道でもある）との交錯が、「文化センター」の第一展示室を「陸軍病院壕」とする理由となっていた。そういえるのではないだろうか。

本報告文はいまだ中間報告であって、本来ならば必要な厳密な立証がなされていないが、「追悼」に関して、その実践過程を追求するならば、「観光資源」（注1）、「教育資源」（注2）、「地域づくり資源」等という性質と「追悼」との「重層性」、「町の歴史の再構成」「人間関係の再構成」等と「文化センター活動」との「相互反映性」がある可能性がある、ということは、最低限、仮説的には主張し得ているのではないだろうか。

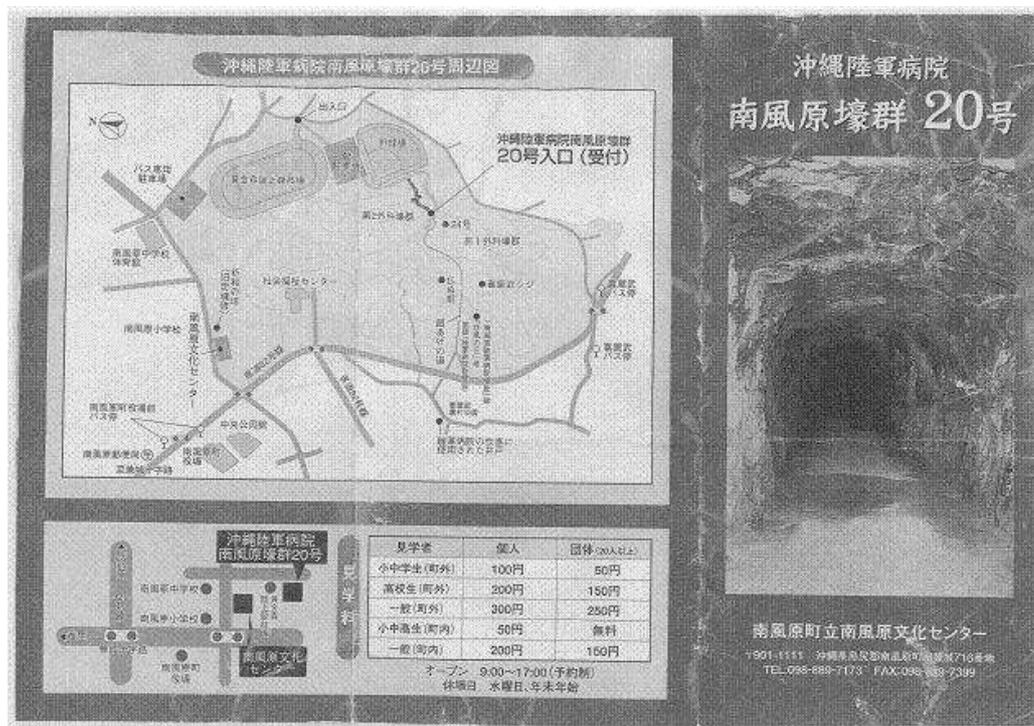
以下、その例示を兼ねて、この後の歴史を現在まで簡単にたどっておこう。

まず、給食センター跡利用の検討委員会設置が1988年になされた。現在の太田館長が当時教育委員会の社会教育係長で、検討委員会の担当者となり、委員会にユニークなメンバーを集めて議論を開始した。上記の議論の中で、「町のイメージ」を「陸軍病院壕」に反映させるとともに、「陸軍病院壕」の存在を「町のイメージ」づくりに活用するというような形での「相互反映性」があったことは言えるのではないかと思う。「普通は3ヶ月のところ2年11ヶ月掛けた」（太田館長）という発言がその傍証となるだろう。なお、インタビューでは、南風原文化センター関連施設整備に竹下登首相時代の「ふるさと創生事業」（1988年～1989年）の資金も活用された、という話も出ていたが、具体的に何に使われたかは確かめることができなかった。

病院壕は、病院設置時には30ほどあったといわれているが、当時、調査がなされてお

らず、内容は未確認であった。大城氏たちは、考古学者と共同で継続的に調査をし、計測および遺品収集をした（収集された遺品の一部は南風原文化センター2階で展示されている）。平成2年には病院壕群を町指定文化財とした。その際、県からは「時期尚早」といわれ、文化庁からは「100年は経たないと。文化財は人間の作った価値のあるもの。戦争は文化財という概念に当てはまらないのではないか」といわれたが、「町独自の文化財条例」をつくって、その末尾に「沖縄戦に関する遺跡」という文言を入れた。このような「強引さ」の背景には、たんなる社会教育施設ではなく、町のアイデンティティ確立作業の一貫として、病院壕の史跡化事業があったということが上げられるだろう。じつは、南風原町は、那覇市から車で30分の利便性ある土地であり、人口のほぼ半数が新住民と呼ばれる人々によって構成されていた。このような住民構成であることが、町のアイデンティティ確立事業の必要性を関係者に認識させたようにも思われる。

また、南風原文化センターは、全国の戦争遺跡関連施設・自治体と活発な交流活動も行っている（松代大本営等）。このことは、沖縄全体が、日本の戦争遺跡の象徴的意味をもっていることとパラレルな現象として、かつ、沖縄がそのような存在の仕方を、自らの観光資源としていることともパラレルな現象として理解できるかも知れない。21世紀になって南風原陸軍病院壕には新たな展開が生じている。「黄金の森の公園化」と「壕の公開」である。現在、諸工事が進行中であり、第一陣として、2007年6月から「第20号病院壕」が公開されている。（添付資料参照）



【写真2：沖繩陸軍病院 南風原壕群20号パンフレット】



【写真3：沖繩陸軍病院 南風原壕群20号入場券】

4. おわりに：追悼の人称構造論からみた南風原陸軍病院の特質

我々の研究会（2005年度から2007年度に掛けての、死の社会学研究会）では、「追悼の歴史的質的变化」に関して、「人称構造論」とでも呼ぶことができるような試行的議論がしばしばなされてきた。すなわち、以下の2つの仮説にまとめられるような議論がなされてきた。

＝表1：追悼の歴史的質的变化と人称構造＝

仮説1「追悼は、1&2人称（私たちへの追悼/あなたへの追悼）で始まるが、関係者・遺族の高齢化で、3人称化する（かれらへの追悼）」

例：戦友による追悼/遺族による追悼から、後継組織成員による追悼へ。

仮説2「追悼は、時間が経って、その人称構造が変化するにしたがって、母体が当事者団体・家族団体から、公的組織（財団法人・自治体）に変化する」

例：戦友会・遺族会による追悼から、自治体による追悼へ。

時間の経過に注目する観点からは、追悼施設の運営の形の変化が、解釈可能になるように思われた。仮説1を60年間で起きる変化であると考え、ちょうど小泉内閣（2001年～2006年）が、敗戦後60周年を含むことになり、「第2次世界大戦による戦没死者」関連の追悼が、この転回点に来ていたことになる。小泉政権で、靖国神社問題が外交・政治問題化していった遠因に、この追悼の人称構造論的变化をみることもできるのではないか、

(遺族による追悼から、社会的公的追悼に変化する時期に当たって、その形態を確定する必要があり、どのように追悼形態を確定していくか、という課題が紛争の根源要因になったのではないかと) という議論がなされた。また、「八甲田山・雪中行軍遭難事件(1902年)」からは、2002年で100年が経過しているため、現在の姿(資料館が青森市観光課管理になっていること等)を、仮説2の結果の姿として、解釈することができるのではないかと、という議論がなされた。

しかし、「南風原文化センターおよび南風原陸軍病院壕」に関しては、この議論を単純に当てはめることは困難である。なぜなら、すくなくとも南風原陸軍病院壕においては、はじめから「追悼」は、「3人称」のものだからである。けれども、上で見てきたように、山としての「黄金の森」は、「1人称」的追悼対象でもあった。あるいは、遠く離れてはいるものの、実際に「陸軍病院壕」で死亡した兵士関係者や看護関係者にとっては、それは「2人称」的追悼対象であった。この混乱が、顕現化し、解消されていく過程として、南風原陸軍病院壕をめぐる歴史を記述できるのではないかと、思っている。上記第2節記載の「重層性」は、「1人称の追悼」、「2人称の追悼」、「3人称の追悼」の「重層性」でもありうるのではないだろうか。上記第3節の「相互反映性」は、各人称のアクター、すなわち、「南風原町住民」(1人称)、「遺族(象徴的遺族としてのやまとんちゅー)」(2人称)、「平和学習の学習者としての生徒」「観光客」「政府」「自治体」(いずれも、3人称)と「南風原陸軍病院壕」との「相互反映性」であるとも言えるのではないだろうか。そうすると、南風原陸軍病院壕の追悼施設としての歴史は、戦前からの、現地の方にとっての、1人称的追悼の場としての歴史を背景に、戦後の本土的追悼の地、すなわち、時々戦友・遺族が訪れる、海を隔てた「追悼施設」という歴史を経由して、1982年以降現在までの「3人称」的追悼施設に至る二系列の追悼の統合史として記述していくこともできるのではないだろうか。証拠のさらなる積み重ねが必要であろうが、そのように思われるのである。

【注】

- (1) 南風原陸軍病院壕を観光資源として認定するには、動員数が少なすぎるという問題があるかも知れない。完全予約制、かならずガイドがつく形で、かつ、1回に15人ずつしか壕の中に入れない形では、とても大量動員は望めないからだ。しかし、壕のレプリカを施設として持っている南風原文化センターには、年間3万人の訪問客が入っており、長期的展望としては、「観光資源」とすることもできよう。(ちなみに、「ひめゆり記念館」には年間80万人の動員があるという)。
- (2) そもそも、南風原陸軍病院壕は、町教育委員会の管轄下であるが、壕を含む山全体が、今回の公園化企画のなかで、学習施設化される計画になっている。たとえば、スタディツアー用コースが「平和」「自然」「民俗」と、3コース準備される計画になっている。

【文献】

青木 弘美・高橋 広太郎・浅見 良太2007「第3章 南風原陸軍病院・南風原文化センター」嶋根克己編『戦争博物館比較調査報告書Ⅱ』（専修大学文学部「社会調査・実習」2005年度）：56-84。

G R G ホテル那覇東町、発行年不詳、『沖縄本島MAP&観光スポット』、G R G ホテル那覇東町。

樫田 美雄2007「南風原文化センター— 追悼（施設）の重層性：地域の伝統文化と街づくりと追悼施設—」（第22回「死の社会学的研究」研究会、於中野サンプラザ会議室、2007年7月29日、口頭発表レジュメ）。

那覇出版社編1982『記録写真集 沖縄戦』那覇出版社。

名嘉 真宜 1999『沖縄の人生儀礼と墓』沖縄文化社。

南風原町教育委員会、発行年不詳、『南風原みぐい』、南風原町教育委員会。

南風原町、作成日不詳、南風原文化センター紹介サイト（[http://www.town.haebaru.Okinawa.jp/hhp.nsf/\(wvdai\)/A2B5B13D544EC63D49257004000FD7BA?OpenDocument](http://www.town.haebaru.okinawa.jp/hhp.nsf/(wvdai)/A2B5B13D544EC63D49257004000FD7BA?OpenDocument)）。

【注意】

このファイルと印刷発行された報告書本体とは、文字・単語の行内位置に相違があります（頁レベルでは記載内容に違いはありません）。引用の際はその点にご注意下さい。

【書誌事項】

樫田美雄2008「ある戦争遺跡にみる追悼の重層性と相互反映性-地域づくり資源・学習資源・観光資源としての陸軍病院壕-」in副田義也（編）『死の社会学的研究：平成17年度～平成19年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（A））研究成果報告書』（研究課題番号 17203034、研究代表者 副田義也（金城学院大学現代文化学部教授）、平成20年3月発行）：146～154頁。

【連絡先】

〒770-8502 徳島市南常三島町1丁目1番地 徳島大学総合科学部

樫田美雄（かした よしお）

TEL&FAX. 088-656-9308（ダイヤルイン）

E-mail : kashida.yoshio@nifty.ne.jp

<http://www.ias.tokushima-u.ac.jp/social/>